

ほうじょうき

かものちようめい

方丈記

鴨長明

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。

玉しきの都の中にむねをならべ、いらかをあらそえる、たかきいやしき人のすまいは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。或はぞ破れ(や)けてことしは造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。所もかわらず、人も多かれど、いにしえ見し人は、二三十人が中に、わずかにひとりふたりなり。

あしたに死し、ゆうべに生るゝならい、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いずかたより來りて、いずかたへか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲に心を悩まし、何によりてか目を下ろし(ば)しむる。そのあるじとすみかと、無常をあらそい去るさま、いわば朝顔の露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといへども朝日に枯れぬ。或は花はしほみて、露なお消えず。消えずといへども、ゆうべを待つことなし。

(大略)

川は変わることもなく、絶えることもなく流れ続けるが、しかし、その水は、変化し続けている。川の上と下と部分にうかぶ水の泡は、生まれては消え、消えては生まれ、永久に止まることがない。世間の人やその住まいもまた、そのようなものである。

寶石を敷き詰めたような都の中に、身分の高い人や低い人たちが豊(いらか)の高さを競い合うように住まいを並べ、時代が変わっても消え去ることがないように見える。ところが、本当だろうかと聞いてみると、昔からある家は、まれである。或いは、去年焼けて、今年新しく建てた家があり、或いは、豪邸が滅びて、小さな家になってしまふ。住む人も、これと同じである。同じ場所であくさんの人が居ても、その中に昔ながらの人は、二、三〇人の中に、わずか一人二人しかない。

朝に死ぬ人がいれば、夕べには人が生まれるというのが、世の習いだが、それは、水の泡に似ている。生まれやがて死ぬ人は、どこからやって来て、いったいどこに去ってゆくのか、誰も知らない。また、この世という仮の宿で、誰のために心を悩まし、どんなものに目を染しませるのか。家の主人もその家そのものも、無常であることは同じで、いわば朝顔に似た朝露と、何ら変わることはない。あるときは、露が地面に落ち、花はその後に残っている。しかし、残るといつても、翌朝には枯れてしまふ。あるときは、花はしほんでしまふが、露だけが残っている時がある。けれども、残っているといつても、夕暮れまで残っていることはない。

鴨長明(かものちようめい、一二五五〜一二二六、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歌人・随筆家)。引用は冒頭文。「方丈記」は、清少納言の「枕草子」、兼好法師の「徒然草」と共に、日本三大随筆といわれる。随筆は、日常生活で思いついたこと、驚いたこと、感じたことを書くものだが、長明はむしろ、ノンフィクションライターのよう書き進めている。その文体はリズム感と臨場感に溢れるすばらしいものである。

長明は、存命中に、四つの大きな災厄を経験している。安元の大火、治承の竜巻、養和の飢饉(放置された死者「四万二千三百余り」と記す)、元暦の大地震(一説には、過去の南海トラフ地震の一つという。「世の常ならず、山はくずれて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり」と)。それに、(長明にとっては、ということだが)平家の盛衰、福原遷都、木曾義仲の挙兵などの一連の争乱がある。疾風怒涛の時代であった。しかし、人はこうした災厄を、すぐに忘却すると長明は嘆いている。「月日重なり、年経にし後は、ことばにかけて言い出づる人だになし」と。冒頭文の無常観に浸る文章だけではなく、深い教訓を含んだ内容は、現代にストレートに繋がるものである。